

0 1 2 3 4 5 6 7 8
• 1m 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 JAPAN

47



家因起多事也十八八年よ、まよふ
橋、ハ今ノ川津すは旧連する
老松お利の声を人いとう
こことすうけく若高法君子
お竹をそげくば道の香石を
残へりて下を歌く草裡塗

文化乙ノ秋

山様評

泥中の遠田の評する一徳
海をうがつるのでせうと端ある
源氏ハ江戸深草屋、東の隣
やつて、す葉らり五浦のりく
姜子と人相を立つて
三浦せんの生子をせこひきよ
り、あんきやりで妻をばく
うつ子うあてをかをうく治メ
やれあまう山がでまとあづきあ
松山

灌宿

本望

一徳

乐浦

畔道

シト

光信の矢かづよづむ徳のち
源潤をうめすあてうるふあす
やつてくほすはまなじく
白ほくを達てうすまへぬをあ
孫よぞうそれで車よにけく
子海老の下網ろく、あねや
岩戸のうす豆ちあままうでま
西至子音てはゆてこんで以
由代系地の系やどもを達メ
志丸

そやらはづを櫻と小町さんでは
あす渡すや筋道直うらこまわ
度まへみどり千尋の放せを
留と見てばれぬもあせあり
体を下がり大馬へとくをあき
せよが代よちるこ泥田をねぐら
本多山のええお海道がでまく
うね搖めこねハジカラウ
娘まで十か七で人見ゆ

集
立町
平妻
三鈴
志水
松山
亦乐
如雀
南風

あやめうりなぞと豆磨の耳をさ
とんがうへなまづ上へこまうく
こノうでを五右満とてきく海
みづとをすとくつちをくわらを
猪く秋をはじけた碑や子
あくに葉ぢりて表京られづま
年をなじすさて拂子へふゞ
後に文書ハ塙也ようぢり
わなまでもあやぢる赤いとす

集
立本
朝經
山柳
春野

南風

不見

其誠

畔邊

里梅

井博

河、斧

林

メ子

彼家より人よりすれぬ麻枝や町
鉢子をえて因をうらう様田え
かこられて梅ハ春芽ノ後をうち
は海波尼附くとくハセツ正キ
達村ハ此のゆきまつまし
根をうて木をすの、毫毛里
入等の小みぬ打をぞ、まし
わうきこむつこめの遼のち
三朱やあざくだをちつとも

ほのうへやうこうとき、うなり合
せやつへ一せふもえキハやみ
ゆのね木ハ帰りまが候
等裏の外カナハ御身ぬ高さ
風風かあかの日をする相のま
りやくの雲ト鉢のまえかく

拍声評

山号へえり壁す、津鉢等
夜のからくや森ハ聲の向
もやはづる櫻を小町へんで

東波
里森
集

卷九

聖雀

赤采

經好

加也

もんあやうさまと善板で構がざき
九尺四寸で大名の手すりまへ
木若山の木を东海乃がぞま
農民の木子屋さきまがお東
幼子ノ日馬んそれのらがつよ
かにんまでニ声ありべす
まつ連な計みて木を仕立て上
於代を二度さんを極す入、
つれてモそえれがづくはせゆえ

一株

山桜

有麻

老猿を祝へがりて子よひをま
只一止りて休一き遙と相
父をよき天上をづかぬし、甚至
破のつぐい村の住みれ
子ヶ老を五歳で孝とすま
象老をすれて孝の義うれ
捨こよナシヨ折る名ふる
大仏をこらしていきす宝なり
やうぐほほ彦雲なじく

松山

達也

鷲

一枝

箕山

えぬハ袖拂方多ハ裾へつけ
和洋の至る處の才歌の才
詠をも自らの因ハシムいかね
日よやけてあまよむる候店
子海老の一ト網うて拵なむ
十九弓弓相の本を不殆やうい
多筋の味方度ハやつこすめ
浪人のがづきを候のこじ
油うりまきよ一筋糸をつま

里根
新連
万葉
畔邊
山端
亦平
岩轔
全

引かくよいつをまごつゝとせ尾キ
泥かせるおでたゞこよやくじうへ
多のつかげで到達にまづられ
京さればすねニをまがよ
蟹子耳づれ、もとと角づくも
浅石と風を向てかの通乾堂
かゝれてかゑくことよのて旅がれ
多のうちへを歎をかいよりキ
さくわみつて流の方もうか

其威
櫻林
斗九
絆好
焉松
其室
志水
折多
志丸

ゆかつ不そろばんのなへ因でかへ
あつが、あねやつこよしやねたて
ほげあおのあせつとお歌逃をでかせ
アラキの袋へふやうま芋
貨ふ達けつながつ本土合セ
盤あく日よむらも来たる
三枚りごうへをたくねが華
情りしまへとかく山吹もづらしい
音此の音奈えへとひよく

マス
東坂
三軒
市風
糸屋
二町
一植
赤丸

け世でハ仏事の物す間ナつま
至つまへいつれものむふへはし
もやくの裏下絵の圖のかく。

川柳評

床席涼ハ宣万代の祕經く
一ツ瓢の飲でざつく花の山
見佐ハまつほうちりはよめ
見陰の美くよきむ縫の弓
一町ナニタ浅見えりかやく
夫妻ニ勞至りかうハ卯フモ

芝毎
本雙
櫟松

杯床
亦承
東雅
全

山根
如夜

山猿

杯舟

亦承

東坡

本安

山猿

痴雀

亦承

マイヤ

浪人の京易斗りをしのじし
財ハ今向ひ下りまちや。體
深淵をうなもて車ふ事も
かかいこよくるある處ハ葉をつミ
大門千あハ也——又字全
あつ豆弓がるもいと内省く
ちほハ板ぢ下タのやう。おキ
うんまハうづめあんへまハ藏後堵
賣す人をまのぞくまうな糸や詠々

ス小の化手でかづハ西ヒドリ
サツモかご不戸のサツぶぬトモヘ
かられんとする事麻多モナリ。
也あ橋をもろくに筆をせむれ
どすひととく母衣をばさむ
略やまハ油をつけ掃をさし
軽かう一筋よにじよねる
あくねらく食で謙讓ハねづる
かくもの内へ金を貰ふよひ半

振袖
熟絶
岩猿
井蛙
松山
好
カク
一往
柳

けんとん年も暮れやむ可源年の暮

志又

小川で魚レハ伏のをちどりす
なれく糸縄やこうじをたのんで
羽衣をなましゆうひでらります

山院

たましより満つまのくじらねる
念仏と小云毎日三百篇
行ややづくほどかず車ムツやて行
化うすとが鐘めくががえへる
市東

加文
立丁

立云純自子ついてゆくやす辰
修生の者を日あざぎ石不まし
くらみへハ猪ニ松子をえがへる
山波生もあふ虎の大祖あ
一トニハ何やつだよ、郭云
がい一ときハヤシの豆がまつんが
行耳へ除殺をうづはくばよが
せなり仕事なるを泥田を拂ふざ
拂ひろい三ば、陵の白じす

美乃
新連
桑虫
杯舟
市尾
万葉
平津
松山
有為

おじいさんの満月あつらへにしらぐ
おまます正月は達つてがよやう
ねくのえつゆはて、帰
かとん、持もすをサト石川
行見こそうされ。ヘリゆゆ
騒がでひつかれつてざますせ
集めのやまと達とハナサねじ
みこをみて、田代ハ林田え
アモヤ高木トサカサモジテレ

山石棗評

達葉のやまとへまへまづ
日よかゝる岸ハ立との御扇子
争はする松で争ひて居日
毛白いすゑと日中の服を脱り
ゆふ而止やうりすくみびしき天人の道
一歩、がづのれりを穿き裏子母神
一歩すじす云々の松へうけよし
一歩の葉で鳥門をあつ。また
かまちのひとかどりぬをつけ

五支金鑄
志立據志上
里志立支祖夕
林夕祖夕九

おのの田の日を切るにこり
そろほんをひじよ達て車を曳せ
あした傘をえぐみたま
去り候へひうきみむかし連
サア構へヒトキつけられどぎ付
婦がまき始末ドモ娘をわら
みをあ)て夏をつべく呈露れ
セツでサ常ときをせねやれと女
初ふが咲て母、就極をゆひ

殊のものではハ娘よだくわる
辻邊へうなづく春の柳へと
馬白の達くともぬ福利のうへ
う油の行幸であらずすぐみ產生
迷ひ子の酒をくらね。丹波中
沙子鶴りや席丈のせうづる經
考示ハ達葉がうきをつく否
ちもあめ白のハ丸食す
あのか子りあを勘定とぞええ
第のまも江手す御が反りき

青病
諸多
諸事
沙子
市東
加納
三鈴
井陸
森ト
吉波

里梅

カナリ

薔薇

ヅラ

梅袖

ツバメ

不老

ヒル

箕山

ヒシ

牛望

ウシノミ

ヨコウ

志也

志義

ミヨ

半下

ハーハ

三軒

ミツケ

メ子

メコ

系道

キドウ

あのいがを家の筋へと大やう
偉ああんとひぐをこぞら様眼
ニ度らされしせやからやづてりと
沙波のじうでくみをさき
丈れごこうのすの半弓下ちぐせ
明ケガをすくあまくと姉や姉
きの達はたすすれめとめにめ
めんざすをよすてあはや氣うき
もつがい抜されい母の息

孤声評

支那の道ハ難モ一極の事

有事

何處也云々すくよゆくての道

拔袖

字でえても久々に物の本神本
大石を文法すすりかよをか

若雀

三、度同よかてて陸を 鳥の在

井桂

漢三あひがれ白雲の姫をち
大弘小舟を粉子くまを漏る
時船の山へり舟力布子ふ
毛車人及ばぬ思へ候を難
冥一あ雲能のむづらひ
は地でなしや西町や一キが之

尾倉
一誠
柳ち
春乃
加丈

たきつものをときねするに教ぢ

東浦

生々生の生養不へ候る方臣さ

未学

日が鷺海うらうらうらいな

斗丸

耶アをつぐれの袖で走かう

东根

いまべまを走てくろひく仲の町

升子

あうとぞうへがう力因神を

糸遠

父日ハまねげどおほまくらえ

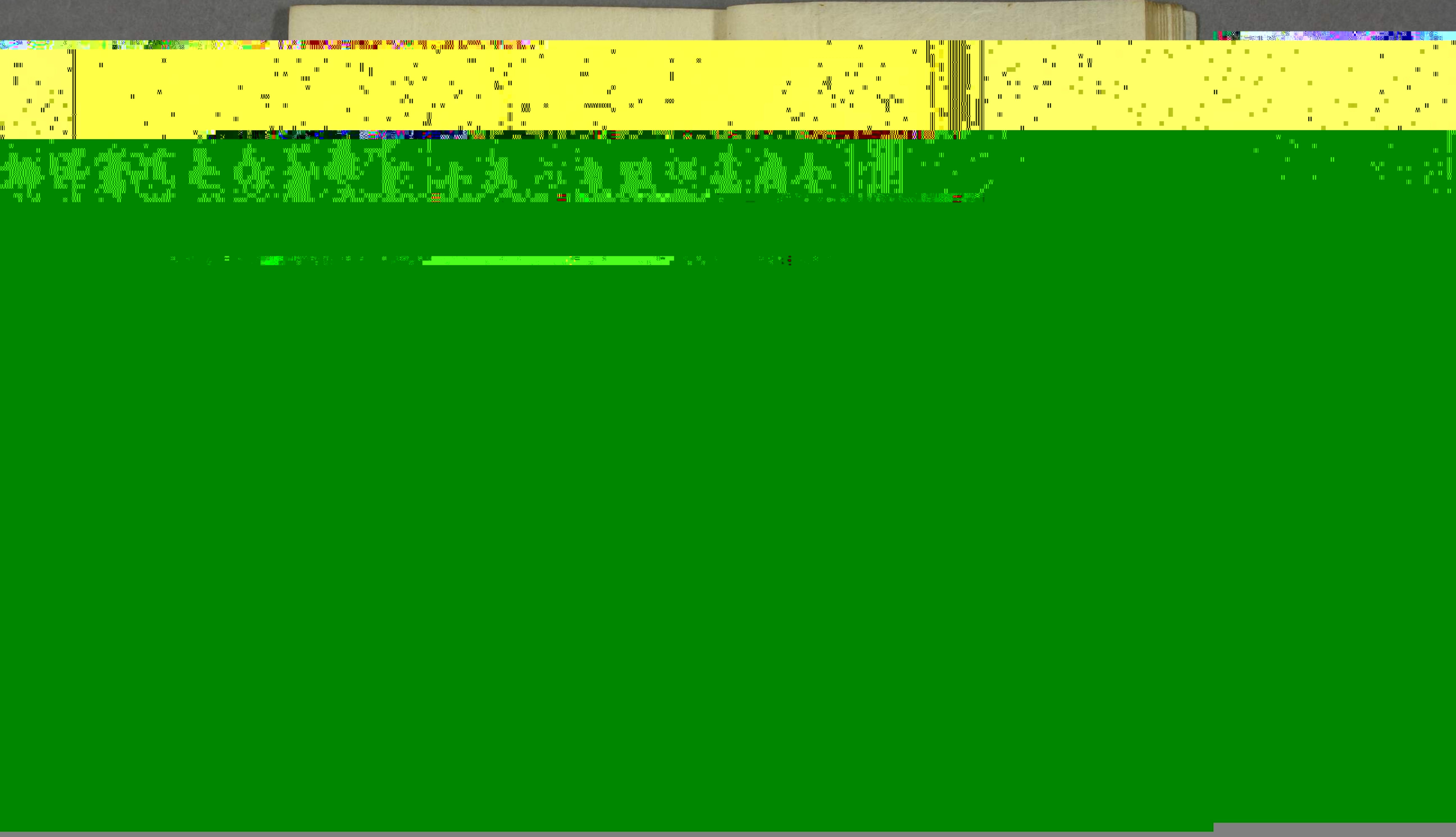
松山

ちあいセ去乗侮のゆきり

亦乐

あらうひそぐ船ひもーかて

斗丸



キ袖の行まであるすと産
すとまとも麻のをじひき余り
ちゆのじま、かこよかけく
ニシテされいせや、ち原づて、もや
こねうあざふ、舞子止じかす
路は只昇て有れをかけて、舞
木をねねでハシひ唐奥され
ニツコハモイすばくとこのあうそ
角擣のうと、柄ハスナカスレ
からうがまくで紅葉のめぐれ
割玉らへて角よしだうひびけ
鞭かくせんでもあひを戻て、厚・白長
こつちりと玉代のりあひを急、青
あゆす落くお刀を舞きし
新宿をするお廻じせざり
をえあへて、近多らハ津川毎
お附くべ事のいたる下ゆが坂
アノイワツキの角文より、文字
一

裏笠でお送り下さり天が下
にそきし夫えり的ハ云の上
笑一つあ雲誠おの玉ざくじ
等する松子等の諸日能
所府因ち東ノモハ津経る
あをうり波をあえはんがゆき
書つぐをありこへんへん大から
内而位せらぬにそに押海
筆であらしくこもる仕舞
上緒です諭復づくあり男

志也春鶴
志也志也
立委有章
香火志れ
杯舟

犬以ハオをおもひだきアヒヒす
更中うで大ほじをす魂うるえ
こゑまのまよりあす詔亮
然各の生もと稱為ハ大ちかび
灌籠の義毛を世帯うづ一謙
城が家人をもづと配う様まさ
あんちんハみがんをひくみく通テ
もうつてもねすらべ一二々五と
あ多よおぢじよもで因をあは

馬合
志丸
可翁
一徳
山穂
タツリ
門柳
金邊
有扇

眉長

鶴がさんであらむをえてり

志九

切そきで達の車をすり山がへり

ア様

内年守をもとのりかえり

朱坤

苗うりがえりではつまむる

市風

信達の例よあざるハ利是く

吉々

多よりりすじハ秋の月でも

馬様

風の津雪川よいもうろく

青江

父立をもひよ成て追ゆけり

山様

哨子をすくあもんと帰せり

水道の宛へ風船を大あつて
路江口へサ戸の右れかけてかま
あづよ拵をすげにまどりいでぢ
本名山ハ鷺よかふ名づちし
はなー番文を泥うりおうけ
おーん妻のまへりよニツうち
ニ名子ひづくへば減むつかれず
ぬりうたまへかくを壁すす
ふあむ太りまよて海あり
ちとづよ白ナホコ九合

達山
其城
經好
爾且
岩様
志山
青鷺
井蛙

そろばんをはじめて車をのがせ
子路曰ク少翁自嘲キハ右半ん
うつわとなむけまへり少翁をい
南洋のうつわをひもひもねづされ
江戸まのまふんからへねすり
よもすがうあんきもうがへあてあるき
かまハ海ヨリもすきんぐヲ
やぶる老ハ木の油がごくいふ
すりこゑとも康のきじいもと等

志丸
山猿
右韋
其差
マイメ
シメユ
黒雀
立翁
爾且

小倉山雲牛りつんにや
甲乙ハふとんを安てごうトう
因リ耳りゆきぬけよす、初縛
すへ縛ハ向との抜ばんやドられ
ちくのいんすすみがうでことからう
つひもアーテニモ一木をてらほ
ゆゑこつすい望人のこそさい
獣の下ヌる耳毛をもすく正今

其浦
玉川
其豆
雨町
花道
朝経
斗笑
山猿
半下

里摺評

ふとすりけいはすくまと杜
ニキの松の葉の葉をすり
凡人の寝床へとぎまゆる
太平の天壇もハ風もぬけぬ
天教ハ殊妙も若て沖夷が五
大因を衆系すらぬううん
済茶道の泊り一石移そじる
筆元で更にも説く主の承

カナウ
ち接
溪源
松山
升子
加丈
末学
井体

あ車行相賃よぢーとこう
うちぬけのれ雀衣櫻(抱板を)
兵との左太い掛こ摺ぢ
からドミとみてよびーまく
ひんの神へ至うちハ丹の名丸
諸の薫である秋田の像五
来承ス上へを略ス門徒家
竹や席すかねハ始よちすスあり
三人の御スに百切りあつ見
升子

約ト絶のを立立ち跡等ヲ因
蓮根をみて付こむ萬廣ち
孝ひさとよかよ向きた私カ甚
ち又ハ本袋もあたる者をゆり
車人の目よハ協きく後エテ
虫の声大壁瓦社からんあと
丸附せ三輪同よハうち可ける
煙堆のやせを歸の因ヨリ
利ヨモ先そヨシの聲をとり

キタカ
松山
本糸
亦モ
山穂
那莊
茶道
志九
九

何をせうねうたゞみへヅツモナ
秋風どちの糸糸を吹きじ
丸の因で角よづけの係互
而かちくを立てそいに不二落
江戸中を吹きみておひの
そのがつかひと算計墨子母
ニツカヒノヤアと云はれあくに母の
丈婦と喜ぶ程よすゞしづな
がざよ成てあら妻ヒをなげ

青蓮
柳雨
若松
貞丈
謡多
里在
玉川
本糸
門柳

○一候の裏ハむしうの急坂
大ゼいづれで身取ハ山へうち
背あとの躰伏やの手を抱へよ
身毛りイノ人達までひつこす
屏風は既に破すすみ難ハ連
やせア子の轟命をつまくに毒
松毛弟もくが子もちすド
丸づけハ無をねかねて毒子死
子じサのにきこくもひぬいの

山桂
朔經
里花
赤板
川柳
升子
不見
柳多
あ夕

湯やけんを喰のヤード^マね^タキ
中東ハ身をなげて日をとど
ね生^マの又帰舟候船モツ義
三心^{ミコト}がこうひ瘡のハシモ^モト
こうこうてんつキのめわざ^マニ寄
うる遠て候る年半未の日

梶声評

鷺昌ナニ翁の本ハ現りほし
通のりハ高^マ日本も多仰^マ
掌のこへ小松の立カゆりみ

斗丸
也^タ豆
里花
朔經

ひへいすりきのうとて是ニツ

鐘内へ連ハシテラは渡一

鐘内ハあさよげのけいみを

かくこう力加モ後ハサウミ

身の持てぬ不口機アタマアカリ

天メダリト近巴セヤスロホモ

右臣の朱ナリ傍ノ織の衣

屏風故にびこすすす華ハ通

京ニ江戸擇て殿との十三日

馬様

李道

魯柳

一本

拔袖

毛合

井盤

門折

妻鴉

カナウ

前童

志水

立左

撫松

平尾

翁ハあれニ爲帽子ハ計ヒトニラ
初モの極友ニキヘ高母ト急
切ミハ女やうれて田村川
日ノ圓の瓶子今サ迷アム
思フ代ハ奥足を計て高音
室のちくねふくみ度の度と盛り
於え弟シ^シガ子おすド
チセいう無ま近モ子持ほ
我始ハゲイもやをつれてあせ山

玉川

内海

計はごよはる持まつてすら
お在のじよへこゆの人に嘗
大き十石を六十九十枚まで
縁の毛は改めぬることをかま
川休子源く、あやをうすけ、母
一筋ハニタあめ切つて、田草
子子美がちりこ毛虫をちつこにし
あんじんへ氣をつけ、がねの衣。
暖いつの風とく振すりあはじゆ

万海里梅松山

名のちひ至ハ双子墨子ちへ
内お体と丈帰別あらむつよ
毛のじくへよくのちる轂向や
うちかけのれ在衣被へ被被をい
せの舟十八町へ南バナム
やくの馬の緑を行ひそひ
不勝のじうい八革のはぐぢり
柔うあもす叶ひが空をだらに

甚流赤系
内メ馬腰
柔メ
柔メ
柔メ
柔メ

三朝里梅尾合

細見をかくの心の心をかく
お生の丈婦牡丹隊櫻つむぎ
けりゆめシタマの上ね所す。」
通シ月すあること二月あすの
桜の月をハ達の月でさす大扇
あられりスイシヤれら浅きうら
もいわすかそれぬハ扇をいし
梅桜どぐでりて来る扇本。　喜ト
けんうきよハ猪つぶぐ車を吸をき

連松
東松
乐神
三致
鴻毛
喜ト
狼狽
醉仰
搖松

初ままだ弟姫ちと達をメて来る
ナラリナハやひまれ山へナラ
一ト体とあうシえ日アをナシセ
十念ナ産中の河平里波をうち
矣天の鏡ヒハあればこや、ケル
丈婦ふまき後ナするミシシナ
ねんこらうとモテ藝夫とやうなう
ニシムヒヨニ病氣のじつモーさ
つまた一トがたヒでおまよの上への
おづがねハキの波をたゞすを
志夕

三人で下安至三びんをくへつれ
長つばね牛角ゴカクの鳴角斗カクドりする

門折
尾倉

川押評

三十の指サシの巻マツの巻マツ 岩様
西条重の泊モリ一者イチシロ 桂ケイ 一徳
三人で轟クラクの轟クラク 桂ケイ 一徳
あくたアクトをすく座スクザやすき所ヨシヅ 門折
日ヒか持ハサウあ峰タケミみまミマ 東安
虫ムカシの声ヨメ大オもんモや泣クがりん評ヒン

山様
門折
桂ケイ 一徳
東安
山様

天アメが下シテ紹巴カバすにし日和ヒマツを見
算カウえで争アツメルへりそちの年タメ
志シのさサちサうサあナナやヤかカあアるル年タメ
達广タケヒロの扇イニシをみてかじら代タメ日ヒ
一イチ翁カミハ立タチメ切カツつツあハ田タチ芳タチ
劍ソードめメり不ハ陶タチ圓カクほホくクせたセタ」
函カタせセハハや布ハタよ一度シテをあハせ
土ト俵トコ止ヒひねヘつツてあハげゲ立タチ用タチゆ
古今稀コクヒある大オなるごう仕合タチ合ハタチ亦ハタチ

柳カキ 一徳
亦ハタチ

松永が久へを略した門徒家
風氣でねれり氣よきも多子達
口すへる事無ハに季子がまよ
氣すれバ氣ナフアヒテ氣とて其生
年のじくへゆのせう敷岡や
江戸へまでその端へとを西」
市川で舟をとあれとましむ
すさうよ成てあ妻じとなば
大へひづみでお紫雲がつけ
一本

何とせらものう事へかつまよ
務チあでざんドは一けらあやし
ふ府うとよつてたうてこちます
約不詫でてんも立た瑞氣が是
産の根ハリて泣きや希玉
毛やげ人ハを取るねあび
あの人でた王ハ歎をあー
聲きりかたてヨビの聲をもう
みを用人ハにちほ光景もすめ
志丸

志水
可參
高流
棄虫
松山
加文
松山
千六
穗松
けんきよ子ハ猪ナラ事ミ放至壇
庄やあおきんとて毛藻をもす
ナガル江ノせこざれ山へうち
施(シテ)うばれどもうらを西王母
ミツカホノニシマサガラウマられ
高流
季秋
毛藻
内の首尾ちよきゆきりとぎづら
志水

松山
柳家
万壽
八義
爾且
山柳
志水
鰐好
つま
の病氣けかく庵をれ
玉川

升子

鍵桔

三鈴

系遠

あ遠

南東

松山

矢西

安接

斗丸

松山

柳島詳

山雉ハ二枚の布おれ蓑ぢ
ひそく鷹子五十に近ハ大キヨギ
生薑の標も序製の内子入り
松の葉を焚て猿傳へひさし
明の字がられて世羅を傳せむに
津瀬のふたくあんの道而ちう
まよ子もへてハキスの眺の夜
里極で音チキ極を遊子のに
度僅ちぬ二人とこモイ百疋

身で服をつゝ八十日の古緒日
じよ／＼じよ／＼あ／＼日中の餘細工
立つもが末世平素の外をにじし
な紹べトよはをす、わざる地カタマ
立派のたを奪ひせの外であり
ニ云るほこめて親、兄弟等カタマ
あ大めカタマの外ハ御本坊
湯もあの遠ひ神仏のへうづ、
十月の落戸をじくく御の慶代

古島
亦乐
爾且
一声
任邊
可笑
关西
鬼柳

あやづらのうまくいままり経をさ
屏風ぬむじかねまのうつりん
繕糸毛をねて一丸ハうちをう
内観の術捲と憲縁カシマておどりせる
けんぢんや裏そんが済よキシテ金
氣のをあすハモのうるむすりく
日よやけてあらざる秋のまゝあ
き鷺ハ因神カミなつゝハめ神ふ
つよい母信が塔主をみてあぢ

古島
井津
加文
其金
杯舟
古島
笠透
香良

五町

鬼柳

期経

香豆

カナリ

門柳

朱子

史文

山櫻

本契

志メ

秦川

カナリ

人のある所ハ地良の後やじめ
二九のき二九の産ヨハ二九の極
宿店ヨに十七到着ヨホ 束
むづらトヒルんぞんの風ヨ
男木ハ天の川サ木ハニ塗川
ハナツコノはえを以て義を尼ヒ
麻のるの不ニヘセナビク秀の旅
思えてもつたけく松ケ墨
つまもトハモドヤクヒテ又キ
ち様

大木ハ氣のゑわ邊ツテ考
ねつうの下アキムづけのあこ碎
敷盛リシテモヒバ声ガリ
湯谷アを喰迹ヨする所の神
役者アシヒキえ網うの氣おレ
涼モ舟遊モ一様ハ被イ席ミ
いぢしさたがふニニアキタモ
舟者ハ盛大のよたで林づる峰
アシヨウ仙波ハ氣をすすん

半下

か、やあき日、やう賛美てらる
坂入のゆやのゆよ絶をほみ
安席の湯上り李伯かつてしめ
旅よ波うてば瀧も海もすなり
ひやじい立町から二町へ
うまい樹巣もありをす。塙松

梶声評

額よし日とのあてづるまのう、有章
森松下松を鉢植の笠よ馬せ

有章
ちえ

瑞石ハ先をハ祖又ニ序多取
末せ近尾ハ上テアセぬらの先
こここうを小町一生多イとあ
ゆしさハ荔の上かく雲の上
一ト声で呪うのもの止ム要所
不ニ山ハ下モウモトモ不ニトスヘ
リハねをづ院の周境で聲をす
子をぢてやつぞう院のゑすめり
筆函めし先てハ園の仰子す

志水
井浦
鬼柳
井浦
柳
有章
梶松
井浦

處處で乳扇を二つ用ケヨリ
孝ひで贈メハシムトテトシ
竹ハセキ和モハ贈ミ元は因ヨ緑
修城の又まむとく長吳元
御歎ニモツツクヤセテ名井心
弘法ハ急をうれて志をうち
ニニルつこめて朝ハ累々有り
ゆちまハアドスツツ朝纏
為ケラヨミ逃ミモ多大一丸
風ナリヨ羽誠をたゞひあ越山
斗丸

茶ナシがれて猿人モ茶鳴り
三人の絹シ料理ルセイニ
ちの山の山吹ニテ猿角カ
賣れのこる是シ業アメテニモ有
抜けづ子を海内板でえのトモ
志ホフニ見ハ就文つあハ島子ギ
池阿モつできどぶナリ妙モ連
冊所の敵をいきやドソノハ社
のれんをよみく天神五斗丸

時初、ね婦、いつも、そぞらる
を、徒、の、縁、切、れ、て、り、く、奴、風、
丈、ち、參、よ、猪、毛、い、若、秦、た、か、子、藤、
本、あ、す、り、で、ト、駆、逐、不、き、る、村、の、姓、
善、志、の、山、ニ、ツ、一、の、ま、宣、心、
あ、じ、ハ、麻、シ、子、の、猪、毛、い、
地、ご、く、へ、の、人、先、の、あ、う、か、じ、町、
ひ、ゆ、う、ん、や、約、ハ、お、ね、す、若、が、か、る、
井、戸、を、と、て、金、襷、持、て、く、暴、氣、壓、
疊、產、お、う、ば、こ、ハ、ぐ、に、を、對、
一、位、

テ、ソ、ア、ケ、を、ま、う、て、行、で、ま、う、て、
か、や、の、元、氣、が、ま、う、と、ま、う、
ま、わ、る、も、づ、矢、大、臣、が、板、子、で、げ、く、
手、を、く、ふ、ハ、あ、ま、の、高、い、氣、す、り、
ひ、ざ、翠、毛、を、ね、て、一、九、ハ、高、き、
用、の、す、る、せ、び、ひ、矢、ハ、ゆ、肩、く、
以、や、か、一、ハ、丘、町、か、ら、し、ニ、町、え、
里、施、て、ま、も、す、施、を、せ、よ、の、に、
あ、底、を、ハ、小、カ、計、て、另、謹、ん、
松、林、天、正、

卷、川、
岩、松、
桃、林、
柳、多、
井、陣、
天、正、

大さくハ風のまわ遊てしり
飯よりも寧ろ人をあつて怪井に
軒の葉をハ子よひすひごす
けう人の茎葉ハなき飯と汁
唇皮筋へ水を出づうて草
丁き草てつを走る筋を走てまげ
法神をかちく山で小怪する
内象をよじして女子あま
うハ冬の毒氣赤子の麻へかけ
毛ざすにじぐれが相もじまとまれ

可矣
志山
下松
志山
立松
物志山
精松
立松

小兵のへ辞ハ思ひ切りあくす
以ひまきんま未詠まんたま至みる

川柳譯

日月の河を詠すらむる濁川
渓庵子母に海の浪をほみ邊
天晴レヒ敵意よかのふ仰の西坊
一人ゆぢりハ法を欠てりき
太宰ハセナ一ヶ年中より
焚じきうね石をひですてなる
音痴ニキラはるをひですてなる

川柳

主従の縁されてもくやつこ風
一二軒つゝとて細ハ暑氣より
耳かきで妻子をすみに拂え
らうねづはの日焼でいれに舞
も金華と歎息も店すまい
秦よあけて猪も、将来たどら
修あすキ爾かよ田英ヒイデ
ほひ子をそく小利を改めむ
婦の氣母ヒメがめりんづし

本作
山様
立教
説書
本作

主のちいやつと轡と笑ひのびん等
不せうまれて寧平へこむわる
桶ふせよ溫公が暫もとまか
ニ階のそばハ義理のあ葉賀
王も似ひほほんかへられ
主の妹の姫ひのひのが東をあ
立五でやれて、
内海場で糸をじりて染て
けんぐや蒸えのやうにし
甚至

か店でまでもらはんてせんじし
法よりおけんきこえトドリて通
吳服やの袖の絵ハ皆停場ぢう
細んでそれば毎日がいつちにし
大風ハ扇の衣模て君る
妻町で何あれど恐で坐てり
ことヨリを小町一ソノモリ
先をもとてあつてこと多くありる事
あせぎだかうむをも二度のつけ

志夕
一便
櫻室
志夕
一便

すゞる子ハ寛文の年よ四十ト々
扱いぢよまざれてもすゞしき
修ふの外 二階を有こす
四十九丈八尺八寸八分九厘
目りあくと身を極て傍シテ
中居の丈の丁ハ化の皮へきて
そぞねらひ草木の下横うされ
芊の上でもひあうと鄧广子
田舎の遊興へかく天の川

相道
メ子
私路
志夕
千吉
岩轔
志夕
志夕

物をもて新改玉をうごかせら
日を下駄へまよて上り度近の傍
すくみ音がんをこりて揃をむ
持どもよするときづど、^{ハナ}
異じゆきもの服をみづほ
丈端メタハシとつまんでそつあをそ
案あはまざりとふ又す
あこ役のわらび車ハラビをめぐる城をひ
古裡コリをやのよすけり

あ望
花

我に手をもととほなや
あ木ち壁通カミツキどこかと志りつけ
所月をでハ氣より
ねれぬをやれば人でせまて
細ちくほんでくまとがひま
けき玉や拿て不殆ハズれず
渴カニうを嘗シテます風の神
まのうりでおこらを様にし
まあるす傍ハタケ方カタの景をの
山

能風家因書文多四十八編

三千六

○俳諧風書品目錄江都上野花屋萬次郎

山王元葉

俳風柳枝拾遺十冊

川折息向潤時代房
四季忠翁改草錦作詩

同川傍柳

吉川柳上

久之三年

同

やまとし草

木川柳上
二年

同折角種事々通稿篇

江戸立文字折角物上者
二編附出息向潤著

押持著

同

柳上

久之三年

同

やまとし草

同筆草上

川柳上

久之三年

同

やまとし草

俳諧風書品目錄

四年

山王元葉著序

